

スクリーンホッターライン

本物を見ること、不思議を思う心

from 新栄小学校

十二月二日(月)、劇団「たんぼぼ」をお招きし、「親子観劇会」を行いました。「めざせ!秘密のコッパ島」という演目でした。誰も恐れて近づかない島に、主人公は親友と冒険に行きます。それは、昔おじいちゃんが家の蔵で会ったカッパの忘れ物を届けに行くためでもありません。ドキドキと感動の秀逸な作品に、子どもたちも大人も満足の一日となりました。何よりも、生の演劇に触れたことは貴重な経験になることでしょう。

劇中、祖父の久一はカッパのカジとの再会を待ち続け、主人公は祖父の思いを果たしに行きます。ところで、みなさんは、カッパの存在を信じますか。カッパはカワウソの見聞違えという人もいます。実際、カッパ伝説の残る地域はカワウソの生息地とかなり重なります。「川の岸の砂の上には河童の足跡といふものを見る…」柳田国男の「遠野物語」の一節です。日本の文学作品には、カッパが多く登場します。劇中に登場するカッパは犬は実在し、岩手県の常堅寺などのいくつかのお寺を守っています。「カッパが火事を消した」という言い伝えも残っています。いたずらをする話も各地にあります。

「になれる」と言います。ときにいたずらをしつつも、私たちを守ってくれる生き物として、昔からカッパは私たち日本人の「心の中にずっと生きている」そんなふうに思えるのです。子どもたちは劇中のカッパを見て何を思ったでしょうか。科学的に考える力も、不思議(なもの)を思う心も、両方大切だと思います。不思議を思う心は、ときに芸術を生みます。本物を見たこの日の経験が、子どもたちにとって、芸術の扉を開くこととなることを願います。



第六十三話

養鶏のお手伝い

戦後、食料が乏しかったときは、農家の養鶏を子ども達がお手伝いしました。

卵からかえったばかりの雛を、鶏になるまで面倒を見てかわいがりました。鶏を飼っていない家は八百屋さんくらいのものでした。

子ども達は、学校から帰ったら、貝殻を金槌で細かく砕くのが仕事でした。せりや青菜を田んぼで採ってきて、包丁で細かく刻み、飼料と一緒にまぜて鶏に食べさせました。

また、魚のアラを近所でもらってきて外で大なべて、ぐつぐつと骨も頭も砕けるくらいによく煮ます。煮ているとアラの臭いが充満して鼻につくので嫌でした。よく煮ていないと砕けないので、そのときは怒られました。煮てからえさと一緒に高を増やして鶏に与えました。

ご飯粒は一粒でもザルに取り、水分を切って鶏に食べさせます。少しでも捨てはしません。現在では余った食品はすぐに捨てますが、もったいないと思います。



遅くなり、ひどく叱られたこともありましたが、鶏が卵を一個でも多く生んでくれるように願いました。

家では、傷物で売り物にならない卵を食べます。傷物でも中身は変わらないので、子ども達は喜んで食べました。

卵は病院のお見合いや手土産に使われ、喜ばれました。新鮮でおいしかったと後でお礼を言ってくださると、とてもうれしかったです。鶏を家族の一員のように思い出されます。鶏を家族の一員のように大切にすることを懐かしく感じます。

今は昔の物語です。

(豊山町文化財研究会の郷土文集を参考にしました)

